

高齢者の友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響 (その1)

— 香川県さぬき市の老人大学受講生を対象として —

野邊 政雄 ・ 大須賀 翼*

本稿の目的は、高齢者が取り結んでいる友人関係のどのような側面が主観的幸福感に影響を及ぼすかを明らかにすることである。地方小都市である香川県さぬき市で老人大学の受講生を対象にサーベイ調査を2012年に実施した。この調査データの分析によって、次の2点を明らかにした。(1) サポートの授受を伴う友人関係ではなく、交遊する友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、交遊する友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。(2) 交遊する友人関係のなかでは、年賀状の交換をする友人関係、お茶を飲んだり食事をしたりする友人関係が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていた。そして、年賀状の交換をする友人関係、お茶を飲んだり食事をしたりする友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど、高い主観的幸福感をもっていた。

Keywords : 香川県さぬき市, 高齢者, 友人関係, 主観的幸福感, 老人大学

1 本稿の目的

2011年現在、日本社会は高齢社会を迎えている。高齢社会とは、全人口に占める65歳以上の人口が14%を超えた社会のことをいう。日本社会は、1970年ごろに高齢化率が7%を超えた高齢化社会となり、1994年に高齢社会に突入したが、今後もその傾向は続くと言われている。これは、今後高齢者のことを無視できない状況が続くということの意味している。たとえ若者であっても高齢者について真剣に考えていかなければならないのである。このような状況のなかでは、多くの人々が幸福に老後を過ごしたいと考えるようになるのは当然の流れである。ゆえに、幸福に老いるための条件を明らかにすることは非常に重要なテーマであるといえる。また、幸福な老いについて考えることは、老いについて考えていくことにもなる。

幸福な老いについては、社会学のなかでも、とくに社会老年学の分野で研究が進められてきた。まず、古谷野亘・安藤孝敏(2008:139-62)をもとに、幸

福な老いの研究の歴史を概観する。幸福な老いとは何か。この定義を考えることに意義はあるが、抽象的な議論でそう簡単に結論の出るものではない。なぜなら、幸福な老いとは何かについて、人によって考えることが異なるためである。そのため、社会学では視点を少し変えて、幸福な老いを測定するという立場をとってきた。幸福な老いの測定方法についての歴史は古く、最初の尺度としては、1949年にシカゴ大学の社会心理学のグループが作成した態度尺度が挙げられる。その後、いくつもの研究を経て、Lawton(1975)によって改訂PGCモラル・スケールが開発され、こんにち最もよく使われる幸福な老いの尺度となっている。このように、自己式尺度によって測定される幸福度は、Larson(1978)によってsubjective well-beingと呼ばれて広く用いられるようになり、日本語では「主観的幸福感」と訳された。本稿でもこれにしたがって、主観的幸福感という用語を用いる。

幸福な老いの測定方法の研究と並行して、主観的

岡山大学教育学研究科 社会・言語教育系 社会科教育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*さぬき市立志度小学校 769-2101 香川県さぬき市志度727

The Effects of Friendship Relationships of the Aged upon their Subjective Well-being: The Case of Participants in a College for the Elderly in a Small City in Japan (Part I)

Masao NOBE and Tsubasa OSUKA*

Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Shido Elementary School, 727 Shido, Sanuki city, Kagawa Prefecture 769-2101

幸福感の高低を規定する要因を探究する研究がおこなわれてきた。主観的幸福感を従属変数とし、それに影響を及ぼす要因は何かを探る研究は、まず1960年代から70年代前半までの活動理論と離脱理論の論争において盛んにおこなわれた。そこでは、社会的活動が幸福な老いをもたらすという活動理論の主張を検証するために、社会的活動を独立変数、モラルや生活満足度を従属変数として、分析が進められた。その結果、社会的活動がモラルや生活満足度に影響を及ぼしていることが明らかになり、活動理論が支持され、論争は幕を閉じた。活動理論と離脱理論の論争は幕を閉じたものの、その後も主観的幸福感に影響を及ぼす要因を探究する研究はおこなわれ続けている。日本において主観的幸福感に影響を及ぼす要因を探究する研究がおこなわれ始めたのも、アメリカでの活動理論と離脱理論の論争が幕を閉じてからであり、前田大作ほか(1979)が最も古い先行研究である。現在の研究でも、活動理論と離脱理論の論争で重要な要因として挙げられていた社会的活動の変数は、重要なものと考えられており、性、年齢、健康度、社会経済的地位などと同列に扱われている。社会的活動の多少は、高齢者が他者との間でどれぐらいの社会関係を取り結んでいるかによって測ることができると考えられるため、近年のパーソナル・ネットワークの研究の台頭もあって、最近の研究では社会関係が主観的幸福感に及ぼす影響について追究されている。

本研究は、社会関係のなかでも友人関係に焦点を当て、主観的幸福感との関連を検討する。その理由を2点述べておきたい。第1の理由は、高齢者像の変容に伴って、主観的幸福感に影響を及ぼす要因が変化してきていると考えるためである。森岡清志(2004)によれば、1985年以降、高齢者像は変容してきている。具体的には、旧来の高齢者像が子どもへの依存と活動における消極性を特色としていたのに対し、新しい高齢者像は子どもからの自立と積極性を特色としている。この原因として森岡は、①旧来の高齢者像の基盤をなしていた「家」規範の弱体化と家族構成の変化②高齢者における自立欲求の高まり③平均寿命の伸びに伴う老後の時期の大幅な拡張と、元気な前期高齢者の大量出現という3つの要因を挙げている。また、安達正嗣(2005)は、扶養される対象としての高齢者という見方ではなく、自立した個としての高齢者という見方がこれからは求められると述べている。これまで、高齢者の友人関係はあまり研究されてこなかった。しかし、昨今の高齢者像の変容を踏まえると、今後、友人関係は高齢者にとってますます重要な位置を占めるようになる

と考えられる。そうすると、高齢者の友人関係について探究することはもちろんのこと、高齢者のなかで主要な位置を占め始めている友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響を探ることは重要な課題となりうる。ゆえに、本研究では友人関係を扱うのである。第2に、第1の点を受けて、近年、多様な高齢者のライフスタイルについて関心が高まっているためである。この状況は、今後の主観的幸福感の研究では、高齢者の多様なライフスタイルについても考慮に入れていかなければならないことを意味していると言えよう。友人関係は、他の社会関係とは違って自己選択にもとづくため、個人によって大きく異なってくるという特徴がある。よって、友人関係は社会関係のなかで、最も高齢者のライフスタイルにかかわっている。そのため、近年の動向を踏まえると、友人関係と主観的幸福感の関連について探っていくことには一定の意義があると考えるのである。

最後に、本稿の目的を明記しておく。本稿の目的は、高齢者が取り結んでいる友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響を明らかにすることである。その際、従来の研究ではあまり検討されてこなかった、どのような友人関係をもっていることが主観的幸福感に影響を及ぼすのかということを中心に明らかにしていきたい。野邊政雄(2006:271-89)は、高梁市のデータの分析から、間柄にかかわりなく、ともかく多くの社会関係を結び、相手と社会的活動をおこなうことが主観的幸福感を高めるわけではなく、多くの同居家族関係、近隣関係、友人関係を取り結んでいることが主観的幸福感を高めるとして、活動理論に限定を加えている。本研究でも野邊と同じ立場に立ち、主観的幸福感を高めるためには友人関係であればどのような友人関係であってもいいというわけではないという予想のもとで、検証を進めていく。

この解明をするために、筆者の大須賀は香川県さぬき市の老人大学を受講する高齢者に調査票を用いた調査を実施した。調査対象者が老人大学受講者であるから、健康で主観的幸福感の高い人に限られている可能性がある。本稿では、それをあらかじめ結果の一般化に当たっての限界にとらえ、老人大学受講者であっても先行研究の知見は当てはまるのかということ念頭において、検証を進めていくことにする。

2 先行研究の検討

日本ではじめて高齢者の主観的幸福感について検討したのは、前田大作ほか(1979)の研究である。この研究では、以下の2点が検討された。第1に、アメリカでの先行研究をレビューしてまとめた

Larson (1978) のなかで重要だと考えられた、健康度、社会経済的地位（収入や学歴など）、家族（配偶者と子どもの有無）が主観的幸福感に影響を及ぼしているのかということが検討された。第2に、Lawton (1975) が開発した改訂PGCモラル・スケールが日本においても適用可能なのかということが検討された。これらの検討の結果、第1の点については、居住歴の長さ以外はアメリカでの研究と同じ結果が得られた。また、第2の点については、日本の高齢者にも改訂PGCモラル・スケールが適用可能なことが確認された。

前田ほかの研究以後、主に改訂PGCモラル・スケールを主観的幸福感の尺度にして、高齢者の主観的幸福感についての研究が進められてきた。初期の先行研究は、アメリカで開発されたPGCモラル・スケールが日本でも適用可能かということに焦点が置かれてきた。よって、社会的活動、すなわち社会関係が主観的幸福感に及ぼす影響について、十分には検討されていない。たとえば、前田ほかや谷口和江ほか (1980) の研究では、配偶者の有無や世帯類型という形で一応社会関係の検討はされているものの、十分に検討がなされているとは言い難い。

日本ではじめて社会的活動が主観的幸福感に及ぼす影響を検討したのは、古谷野亘 (1983) の研究である。これ以後、社会関係は主観的幸福感に影響を及ぼす重要な要因として考えられるようになり、研究が進められるようになった。以下、2つの段階に分けて、社会関係が主観的幸福感に及ぼす影響を検討した先行研究をレビューする。第1は、社会関係そのものが主観的幸福感に影響を及ぼすものかどうかを検討する段階である。第2は、社会関係のなかでどの社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかを検討する段階である。具体的には、親族関係（配偶者との関係、子どもとの関係、兄弟姉妹との関係、孫との関係）、近隣関係、友人関係などが挙げられる。以下、段階ごとに先行研究をレビューしていきたい。なお、ここで取り上げる先行研究は、社会関係以外の要因が主観的幸福感に及ぼす影響についても明らかにしている。だが、本研究の主要な目的から、ここでは社会関係（特に友人関係）に焦点を絞ってレビューをおこない、社会関係以外の要因については、仮説の提起の際に簡単にまとめることにしたい。レビューは、主に①研究の目的②社会関係の測定方法③結果という3つの観点からおこなう。

(1) 社会関係そのものが主観的幸福感に影響を及ぼすかどうかを検討した先行研究

第1段階の先行研究としては、さきほど述べた古谷野 (1983) と藤田利治ほか (1989) の研究が挙げられる。古谷野 (1983) は、活動理論と離脱理論から導かれた3つの仮説を検証することを通して、社会的活動が高齢者の主観的幸福感に及ぼす影響を明らかにした。ここでは、3つの仮説のなかで、本研究とかかわりのある第1仮説のみを取り上げたい。第1仮説は、「社会的活動とモラルの間には、有意で直接的な正の関連性が存在する」というものである。古谷野は、社会的活動の水準は親密さをともなう人間関係の量によって測定されると考えた。ここでは、人間関係を社会関係と考える。古谷野は、以下のように人間関係を測定した。まず、人間関係の領域として、「親せき」「近隣」「学校時代の友人」「職場（時代）の友人」「趣味・社会活動・宗教団体の人」という5領域を設定し、それぞれについて「比較的ひんぱんに行き来をし、個人的な問題を話しあうような親しい方」という操作的定義にあてはまる人の数を、「いない」から「5人以上」の6段階で評定させた。そして、「いない」に0点、以下「5人以上」の5点を上限として、人数を点数として与え、その単純合計による「社会関係指標」を作成した。ここで、社会関係は「社会関係指標」としてまとめて表されていることに注目したい。これは、古谷野の研究からは、どの社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかは分からないということの意味している。データ分析の結果、古谷野は以下の点を明らかにした。社会的活動は、年齢の高低にかかわらず、モラルに対して有意で直接的な正の影響を及ぼしている。ここから、古谷野は離脱理論の主張を否定し、活動理論を支持している。

藤田利治ほか (1989) は、高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因の一般化を目的として、研究を進めた。そのなかで、社会的活動性の要因を取り上げている。藤田ほかは、社会的活動性を任意集団（趣味の会など）での活動、近所との対人関係、親しい人の訪問、来訪の3つでとらえた。そして、「0～2点」「3～4点」「5～7点」「8～10点」の4段階で点数化している。データ分析の結果、藤田ほかは社会的活動性と主観的幸福感について、次の点を明らかにした。対人関係を主とした社会的活動性は主観的幸福感と正の関連がある。古谷野 (1983) の研究と同様に、藤田らの研究は社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしていることを明らかにしたものである。これに加えて、藤田らは土居健郎 (1971) の甘えの理論を用いて、日本の高齢者における対人関係の主観的幸福感に対する寄与の大きさを評価している。藤田ほかの研究によって、社会関係を主観

的幸福感に影響を及ぼす要因として、重要なものと位置付ける方向性が定まったと言えよう。

(2) どのような社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかを検討した先行研究

ここからは第2段階の先行研究をレビューしていくことにする。まず、友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかどうかをはじめに検討した直井道子(1990)の研究をレビューする。直井は、高齢者の生きがいや幸福感にとって子供との同居は不可欠なものか、趣味をもち友人たちと楽しく語らうことで幸せなのではないかという問題意識から、友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響について検討した。よって、親族と友人のどちらが主観的幸福感を高めることになるのかについても検討している。直井は、友人との交際頻度を尋ねることで、友人関係を測定している。具体的には、友人・知人と電話で話をする、友人・知人と会って話をするという2つの関係について、「ほぼ毎日」「週に1~2回」「月に1~2回」「年に数回」「ほとんどしない」「そのような人はいない」の6つの選択肢から頻度を選ばせることで、友人関係を測定している。データ分析の結果、直井は次の点を明らかにした。男性にとっては友人、女性にとっては親族交際のほうがモラルを高める方向に作用する。直井の研究は、性差によって親族と友人のどちらが重要なかが異なるという点を明らかにしたことも重要ではあるが、ここでは高齢者の主観的幸福感にとって、友人関係も重要な要因となりうることを示した点を評価したい。

直井が示した点を深めた研究として、浅川達人・高橋勇悦(1992)のものを挙げるができる。浅川・高橋の研究は、高齢者の友人関係の特質を明らかにすることを目指したものであるが、そのなかで「高齢者の主観的幸福感にとって、家族・親族以外との関係も大きな影響力をもっている」という仮説を検証している。浅川・高橋は、「近所の人との接触頻度」「親しい友人との接触頻度」という2つの指標を用いて、家族・親族以外との関係を測定した。データ分析の結果、浅川・高橋は次の2点を明らかにした。①男女ともに、他の変数を除去しても親しい友人との接触頻度がモラル得点に影響を及ぼしている。②男性では配偶者の有無、女性では近所の人との接触頻度がモラル得点に影響を及ぼしている。この結果から浅川・高橋は、人々の態度や行動様式、規範の形成に影響を及ぼす社会関係としての第1次関係が、家族・親族以外との社会関係においても存在することが示された結論づけている。ここで、直井が出した結論についての再確認がなされ

ていると言えよう。

以上のように、直井や浅川・高橋によって、近隣関係や友人関係も主観的幸福感に影響を及ぼす要因として重要なものであるということが明らかになった。これらの研究と同時期に、野口裕二(1991)は、Antonucci(1990)の論を踏まえて、ソーシャル・サポートの概念について整理をおこなった。この成果と都市社会学などでのソーシャル・ネットワークの研究成果が組み合わさって、ソーシャル・ネットワークやソーシャル・サポートを用いて社会関係を測定し、主観的幸福感との関連を探究する研究が出現した。以下、それらの研究をレビューしていきたい。

まず、はじめにソーシャル・サポートとソーシャル・ネットワーク、そして主観的幸福感の相互の関連性を検討した古谷野亘ほか(1995)の研究をレビューする。古谷野ほかは、社会関係の指標として、親戚ネットワーク、近隣ネットワーク、友人ネットワーク、親戚からの情緒的サポート、近隣からの情緒的サポート、友人からの情緒的サポートの6つを用いた。具体的には、ネットワークは「訪問・手紙・電話等により1ヵ月に1回以上交流のある人」の数を親戚、近隣、友人のそれぞれについて尋ねることで測定している。また、サポートは「心配ごとや悩みごとを聞いてくれる人」の有無を親戚、近隣、友人のそれぞれについて尋ねることで測定している。データ分析の結果、古谷野ほかは次の2点を明らかにした。①同居既婚子と配偶者の有無は、他の変数を考慮しても主観的幸福感に影響が見られる。②友人ネットワークは、他の変数の影響を考慮しても主観的幸福感に影響を及ぼしている。そして、多くの友人を有する者で主観的幸福感が高い。この研究は、まず友人数が主観的幸福感に影響を及ぼしていることを明らかにした点が重要である。また、サポートという社会関係の質的側面が主観的幸福感に与える影響を探究した点も重要である。しかし、質的側面については、まだ検討の余地が十分に残されていると考える。それは、親戚、近隣、友人のすべての間柄について、情緒的サポートの有無だけしか尋ねていないためである。間柄とサポートの関連を考え、質的側面が主観的幸福感に与える影響についてより詳細に検討する必要がある。

古谷野ほかの研究と同様に、ソーシャル・ネットワーク、ソーシャル・サポートの概念を用いて社会関係を測定し、主観的幸福感との関連を探究した先行研究として、野邊政雄(1999, 2006:271-89)のものが挙げられる。どちらの研究でも野邊は、回答者に8つの課題でサポートを求めたり、交際をしたりす

る相手の名前を挙げてもらうという形で友人関係を測定している。そして、それぞれの間柄に該当する相手の人数を計算して、同居家族関係数、親族関係数、近隣関係数、友人関係数、職場仲間関係数を求め、分析に用いている。

データ分析の結果、野邊（1999）は次の2点を明らかにした。①同居家族関係や友人関係が多いほど、高齢女性は高い主観的幸福感を持っている。②「宗教集団」と「趣味の会・スポーツ団体」といった自主加入型集団に加入している高齢女性は、主観的幸福感が高い。②の結果について野邊は、それらの集団に加入し、活動することで、友人関係が増えるから、友人関係を多く組織することが高齢女性の主観的幸福感を高めることになると推論している。ここから、友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響の重要性を見ることができる。

また、野邊（2006:271-89）は、以下の2点を明らかにした。①同居家族関係、近隣関係、友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしている。②各種の社会関係の中で、近隣関係数が主観的幸福感への影響力が最も大きかった。この研究は、社会関係のなかでどの社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかを明らかにし、活動理論に限定を加えた点が重要である。さらに、最も影響力が強い社会関係を明らかにした点も重要である。本研究は友人関係の研究であるため、野邊が重要だと考えた近隣関係について検討することはできないが、この野邊の視点は生かしていきたい。すなわち、どの友人関係が最も強い影響力を及ぼしているかという視点である。

続いて、ソーシャル・ネットワークの研究を踏まえつつ、カナダの都市社会学者であるウェルマンの研究を日本の高齢者の分析に応用して社会関係と主観的幸福感との関連を探った前田信彦（2006:169-80）の研究を取り上げる。前田の研究は、2つの内容から構成されている。第1の内容は、どのような社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかということである。この点について前田は、友人関係の規模と接触頻度が主観的幸福感に影響を及ぼすことを明らかにした。これは、古谷野らや野邊の研究結果と共通している。前田の研究の独自性が見られるのは、次に挙げる第2の内容である。ここで前田は、Wellman（1979）の研究をもとに、パーソナル・コミュニティを「孤立型」、「伝統型」、「解放型」という3つのタイプに分類したうえで、それぞれのタイプと主観的幸福感の関連はどうなっているかを追究している。データ分析の結果、前田は高齢者のパーソナル・コミュニティが「解放型」であること、すなわち、広範囲に空間分布する友人関係をたくさ

んもつことが、主観的幸福感を高めることを明らかにした。この結果から、前田は個人が取り結ぶソーシャル・ネットワークの類型と主観的幸福感の関連を明らかにすることの重要性を指摘している。だが同時に、この結果は友人関係と主観的幸福感の関連について、よりミクロな視点で追究していくことの重要性を示しているとも考えられる。

古谷野ほか、野邊、前田信彦の研究は、本研究で中心的に扱う友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼすことを明らかにしている。しかし、一方で友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼさないという結果を示した研究も存在する。それが赤澤淳子・水上喜美子（2008）の研究である。赤澤・水上は、地方に位置する福井県において調査をおこない、社会的ネットワークが主観的幸福感に及ぼす影響について検討した。赤澤・水上は、接触頻度を尋ねることで社会的ネットワークを測定している。具体的には、同居家族、別居子、同居孫、別居孫、兄弟姉妹、近所、友人について接触頻度を尋ねている。データの分析の結果、赤澤・水上は次の点を明らかにした。社会的ネットワークについては、親族の差異しか示されず、友人関係や近隣関係による主観的幸福感の差は見られなかった。このような結果になったことについては、接触頻度で友人関係を測定していることや調査対象地が影響しているのかもしれない。いずれにせよ、この研究は、友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼすかどうかについて、まだ検討の余地があることを示している。

(3) 先行研究上の本研究の位置づけ

以上、高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因を検討した先行研究について、友人関係を中心にきてきた。先行研究のレビューから、次の2点を指摘できる。第1に、主観的幸福感についての先行研究は数多く存在するが、友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響を検討したものは、まだ少ないということである。近年の友人関係を独立変数として扱った先行研究において、友人関係は主観的幸福感に影響を及ぼす要因として、重要であることが明らかにされた。赤澤・水上の研究のように友人関係が影響を及ぼしていないとするものも存在するが、先行研究のレビュー結果は、友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響を検討することに一定の意義があることを示唆している。友人関係と主観的幸福感の関連については、まだまだ研究が積み重ねられなければならない状況にある。本研究も、これに貢献することができると考える。

第2に、先行研究からは友人関係のどのような側

面が主観的幸福感を高めることになるのかが明らかではないということである。古谷野ほか（1995）によって、社会関係の質的な面が主観的幸福感に及ぼす影響が検討されているものの、それは十分なものとは言い難い。本稿では、社会関係そのものが主観的幸福感に影響を及ぼすものかどうかを検討した第1段階と、社会関係のなかでどのような社会関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかを検討した第2段階とに分けて先行研究のレビューをおこなった。筆者は、第2段階をさらに進めて、第3段階としてどのような親族関係、近隣関係、友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしているかを追究することが求められていると考える。これは、主観的幸福感と社会関係の関連を探るにあたっては、社会関係の質的な側面も考慮しなければならないということの意味する。そして、本研究を第3段階に位置づけたい。これが本研究の独自性である。なお、親族関係と近隣関係については、調査票の関係から追究できないので、また別の機会に検討することとする。

3 仮説の提起

(1) 友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響

まず、友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響について考えたい。興味や関心、趣味などを共有することのできる相手である友人とは、交際をすることによって、主観的幸福感が高まると考えることができる。レビューで見たように、直井（1990）、浅川・高橋（1992）、古谷野ほか（1995）、野邊（1999, 2006: 271-89）、前田信彦（2006:169-80）の研究で、友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしていることが明らかにされた。以上を踏まえて、本研究でも友人関係が主観的幸福感に影響を及ぼしていると予想する。

また、本研究ではさらに踏み込んだ仮説も提起しておきたい。小田（2003）は、改訂PGCモラール・スケールを使用して厳密に主観的幸福感を測定しているわけではないが、肯定的老後生活観、否定的老後生活観、ポジティブアフェクト、ネガティブアフェクトという尺度を用いて、友人数と幸福感の関連を探っている。小田は、相談ごとや悩みごとを話したり聞いたりするような深いつきあいをする友人が多いことよりも、「お茶を飲んだり食事をする」友人や「訪問したり、されたりする」友人のような中程度の付き合いをする友人の数が多くほど幸福感が高くなると推測している。小田の言う浅いつき合い、深い付き合いという考え方は示唆に富むものである。しかし、何をもって浅いつき合いとし、深い付き合いとするのかが曖昧である。ソーシャル・サポ

ートの研究によって、情緒的サポートの場合、提供者の負担はわずかであるのに対して、手段的サポートでは多かれ少なかれ提供者の負担があることが分かっている。本研究ではこれを踏まえて、付き合いの負担の程度によって深い付き合いと浅いつき合いを定義する。すなわち、その付き合いを維持するのに負担がかかる友人関係を深い付き合い、負担がかからない友人関係を浅いつき合いであるとする。

さて、小田は深いつきあいをする友人が多いことよりも、中程度の付き合いをする友人が多いことのほうが幸福感を高めることになるかと推測したのであった。これは、高齢者にとって負担がかかる付き合いよりも負担がかからない付き合いのほうが、主観的幸福感を高めることを示していると考えられる。本研究では、友人関係をサポート（情緒的サポート・手段的サポート）と交遊とに分けて測定した。よって、交遊の方を負担がかからない付き合いであることとらえ、主観的幸福感に影響を及ぼしていると予想する。以上の議論を踏まえて、次のような仮説1を提起する。

（仮説1）友人関係は主観的幸福感に影響を及ぼしており、多くの友人関係を取り結んでいる高齢者ほど主観的幸福感が高い。また、友人関係のサポート面ではなく、交遊面が主観的幸福感に影響を及ぼしており、交遊する友人関係を多く取り結んでいる高齢者ほど主観的幸福感が高い。

(2) 友人関係以外の要因が主観的幸福感に及ぼす影響

次に、友人関係以外の要因が主観的幸福感に及ぼす影響について考えたい。本稿は、主に友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響について検討するものである。ただ、先行研究から、主観的幸福感に影響を及ぼす要因として、友人関係以外にも重要な要因が存在することが分かっている。本研究は老人大学受講者を対象としたものである。ゆえに、そのような高齢者に対してもこれまでの先行研究で重要であることが示された要因が当てはまるかどうかについて、検討しておきたい。以下、具体的に仮説を見てゆく。

第1に、配偶者の有無と同居子の有無について。高齢者像が変容しているとはいえ、これらの関係は主観的幸福感を考えるうえでは考慮しなければならない要因である。配偶者がいることは、それだけで安心感を抱かせ、主観的幸福感を高める方向に作用すると考えられる。また、様々なサポートを頼むことができる。ゆえに、配偶者が存在することは、主

観的幸福感を高める方向に働くと予想できる。

一方、同居子の有無は高齢者の主観的幸福観の有無に影響を及ぼしていないと考える。本研究は、友人関係をテーマとしていることから分かるように、従来の高齢者像が変化しつつあると考える立場にある。よって、現代の高齢者は子どもに依存しすぎてはいないと考えている。本研究の調査対象者ではないが、筆者は2009年に卒業論文の調査の一環で香川県さぬき市津田の高齢者に聞き取り調査をおこなったことがある。これによれば、高齢者は子どもとのライフスタイルの違いから、それほど子どもと交流をおらず、子どもに依存して生活しているわけではなかった。ゆえに、同居子の有無は主観的幸福感に影響を及ぼさないと考えられる。以上の議論を踏まえて、次のような仮説2を提起する。

（仮説2）配偶者がいる高齢者は配偶者がいない高齢者よりも主観的幸福感が高い。しかし、主観的幸福感同居子がいる高齢者と同居子がない高齢者の間で違いはない。

仮説2について、先行研究を見ておきたい。前田ほか(1979, 1988), 谷口ほか(1980), 藤田ほか(1989), 浅川・高橋(1992), 大沢正子ほか(1994), 古谷野ほか(1995), 平野順子(1998), 小関裕二・戸梶亜紀彦(2006)などは、配偶者のいる高齢者のほうが主観的幸福感で高いと報告している。また、玉野ほか(1989)は高齢女性のみ配偶者の有無が影響を及ぼしていること、浅川・高橋(1992)は男性のみ配偶者の有無が影響を及ぼしていることを明らかにした。これらの先行研究の成果は、本研究の仮説とも一致する。一方、直井(1990), 大沢正子ほか(1994), 赤澤・水上(2008), 石川久展(2009)などのように、配偶者の有無が主観的幸福感に影響を及ぼしていないとする先行研究も存在する。

また、同居子の有無については、古谷野(1983), 玉野ほか(1989), 直井(1990), 浅川・高橋(1992), 大沢ほか(1994), 赤澤・水上(2008)が同居子の有無と主観的幸福感の間に関連がないことを明らかにした。これらは、本研究の仮説と一致する見解を述べている。一方で、古谷野(1993, 1995)は同居子の有無が主観的幸福感に影響を及ぼしているとしている。

第2に、健康度について。健康であると感じていれば、それだけで将来の不安がなくなり、主観的幸福感が高まると考えられる。また、多くの研究で健康度が主観的幸福感に影響を及ぼす要因のなかで最も重要であると考えられていることを踏まえると、

老人大学受講者であっても、健康度が最も重要な要因であると考えられる。よって、次のような仮説3を提起できる。

（仮説3）健康度は高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしており、健康な高齢者ほど主観的幸福感が高い。また、健康度は主観的幸福感に影響を及ぼす要因のなかで、最も重要な要因である。

仮説3について、先行研究を見ておきたい。主観的幸福感についてのほとんどの研究で、健康度は主観的幸福感に影響を及ぼしていることが明らかにされている。そこでは、健康であるほど高齢者の主観的幸福感が高いとされている。先行研究をすべて示すと煩雑になるので、ここでは具体的な先行研究を示すことは省略する。

第3に、社会経済的地位、年齢、就業の有無について。社会経済的地位としては、収入を取り上げる。先行研究の多くでは社会経済的地位として、収入を取り上げ、重要視している。藤田ほか(1989), 野口(1990), 赤澤・水上(2008)が学歴、古谷野ほか(1995)が最長職威信スコアを取り上げ、その影響力を報告しているが、本稿では友人関係が主観的幸福感に及ぼす影響について主に検討したいので、モデル単純化のため、これらは取り上げない。

さて、収入が高いほど、高齢者は安定した生活を送ることができる。高齢になれば、出費は若いころに比べて下がるため、収入はそれほど重要ではないとも考えられる。しかし、何が起こるか予測のできない現代社会において、安定した生活を送ることができることは主観的幸福感を高めることにつながると予想できる。ゆえに、収入を重要な要因と考える。

年齢については、年齢が低いほど将来を楽観的・肯定的にとらえることができるから、主観的幸福感が高くなると考えられる。特に、長寿社会を迎えた現代社会では、前期高齢者になってから亡くなるまでの期間がかなり長くなっているため、年齢が低いことは重要な要因になる可能性がある。また、本研究は調査対象者を老人大学受講者に限定しているため、60歳代から90歳代までの高齢者が存在する。このことも年齢の効果に影響すると考えられる。

就業の有無については、仕事をしていると、人とつながることができたり、仕事にやりがいを感じたりすることができ、生きがいを持てるから、主観的幸福感が高まると考えられる。また、日本人は働くことが好きであるといわれている。そのことから、就業の有無は重要な要因となる可能性をもっているであろう。以上の議論を踏まえて、次の仮説4を提

起する。

(仮説4) 社会経済的地位、年齢、就業の有無は高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしている。そして、社会経済的地位が高く、年齢が低く、就業している高齢者ほど主観的幸福感が高い。

仮説4について、先行研究を見ておきたい。収入については、前田ほか(1979)、直井(1990)、浅川・高橋(1992)、古谷野(1992, 1993)、大沢正子ほか(1994)の研究で、収入が高いほど高齢者の主観的幸福感が高くなることが明らかにされている。日本以外を対象にした先行研究も見ておくと、アメリカではLawson(1978)によって、収入の重要性が指摘された。また、中国の主観的幸福感を探究した雷秀雄・堂野佐俊(2006)は、収入が高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼしていることを報告している。一方、収入が影響を及ぼさなかったとする先行研究としては、野邊(1999)や赤澤・水上(2008)が挙げられる。

年齢については、古谷野(1983)、前田ほか(1988)、藤田ほか(1989)、野口(1990)が、年齢が低いほど主観的幸福感が高くなることを報告している。一方、前田ほか(1979)、谷口ほか(1980)、古谷野ほか(1995)、大沢ほか(1994)は、年齢と主観的幸福感の間には関連がないとしている。

就業の有無については、古谷野(1983)、西下(1987)、藤田ほか(1989)が就業している高齢者ほど、主観的幸福感が高いことを報告している。一方、前田ほか(1979)、大沢ほか(1994)、古谷野(1995)が、就業の有無と主観的幸福感の間に関連がないとしている。

以上に見たように、健康度以外は先行研究で一致した結果が得られているわけではない。このように、結果が相反する状況を乗り越えるためには、古谷野ほか(2007:58)が論ずるように、さまざまな地域で調査をおこない、より一般的な知見を引き出していかなければならない。これからの研究では、どのような集団を対象にしたときにどのような要因が重要なのかも含めて主観的幸福感に影響を及ぼす要因を考えていく必要があるといえよう。

4 調査の概要

まず、調査の手続きについて述べたい。大須賀はさぬき市役所津田支部生涯学習課の職員に会って調査の概要を伝え、老人大学の責任者である5つの地区にある公民館の館長を紹介してもらった。そして、それぞれの公民館の館長に直接会って、交渉をおこ

ない、協力を取り付けた。

次に、調査方法の概要についてである。調査方法は、集合調査である。具体的には、月に1回おこなわれている老人大学の集まりの場で調査票を配布し、回収した。実際に私がその場に出向いて、そこで調査票の質問を1つ1つ読み上げて答えてもらうという方法をとることを許可してくれた老人大学については、そのようにした。逆に、その許可がおりなかった老人大学については、回答者に簡単に調査の目的を伝え、分かりにくい質問項目があれば質問してもらうようにした。そうすることで、回答の信頼性を高めた。調査の趣旨を説明した上で、調査に協力することを承諾した調査対象者にのみ調査を実施した。調査は2012年9月から11月にかけて実施した。

最後に、調査票の配布と回収の結果についてである。5つの公民館の老人大学で配布した調査票の合計は360枚であり、そのうちで回収できたのは259枚であった。調査終了後、調査票のチェックをおこなったところ、分析に使用可能な有効票数は220枚、無効票数は39枚となった。回収された有効票数を配布した調査票の合計枚数で割った数を回収率とすると、回収率は61.1%であった。

5 分析方法

回答者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因を探究するために、次のような分析をおこなう。独立変数に用いるのは、仮説1から仮説4であげた要因である。具体的には、性別、年齢、健康度、配偶者の有無、同居子の有無、現在の就業の有無、年収、付き合い内容別の友人数といった8つの変数である。これらは、次のように測定し、数量化した。性別は男性に1、女性に0を与えてダミー変数とする。年齢はそのまま使用する。健康度は4(健康)から1(健康でない)までの4段階で回答者に自己評価してもらった。配偶者の有無、同居子の有無はそれぞれ配偶者がいる、同居子がいる回答者に1を配偶者がいない、同居子がいない回答者に0を与え、ダミー変数とした。現在の就業の有無については就業している回答者に1を与え、就業していない回答者には0を与えてダミー変数とした。年収は、夫婦の年収を答えてもらった。

友人関係のさまざまな側面を測定するために、11の付き合い内容別に友人数を答えてもらった。それらは、①相談ごとを話したり聞いたりする友人数、②金銭の貸し借りや保証人になったりなったりする友人数、③2~3か月病気やけがで入院したときに看病や世話を頼んだり頼まれたりする友人

数, ④留守でしばらく家を空けるとき, 留守の間の世話を頼んだり頼まれたりする友人数, ⑤何かのことで失望したり悲しい出来事を体験してひどく落ち込んでいるときに心からなぐさめたりなぐさめられたりする友人数, ⑥調味料や自転車を借りるということや買い物のときに車に乗せてもらうといったことを頼んだり頼まれたりする友人数, ⑦年賀状の交換をする友人数, ⑧お祝い事をしたりされたりする友人数, ⑨お茶を飲んだり食事をする友人数, ⑩一緒に遊びや旅行に出かける友人数, ⑪訪問したりされたりする友人数である。つき合い内容別の友人数は, 答えてもらった人数をそのまま分析に用いた。

従属変数は主観的幸福感であり, 改訂PGCモラール・スケールを用いた (Lawton 1975; 古谷野 1989)。これは, ①自分自身に対する満足感, ②世の中で自分のための居場所があるという感じがあること, ③変えることができない物事があることを受容があることといった3つの次元から構成されている。これは, 17の質問項目にそれぞれ「はい」か「いいえ」で答えてもらう形になっている。分析にあたっては, 高いモラールと関連する選択肢を選んだ場合に1を, そうでない場合には0を与え, 合計点を出すという形をとる。よって, 17点満点で値は0から17まで分布することになる。改訂PGCモラール・スケール高齢者の主観的幸福感の研究では頻繁に用いられており, 信頼性も十分に検討されている。

クロンバッハの α 係数を求めると .838であるから, この加算尺度には内的一貫性があるといえる。

分析は, 上記の8個の変数を独立変数とし, 主観的幸福感を従属変数として重回帰分析をおこなう。友人関係については, 一度にすべての友人数をまとめて入れてしまうと独立変数が多くなりすぎてしまうので, それぞれの友人数を独立変数に入れ替えて, 重回帰分析を繰り返しおこなう。本研究では友人関係を11の側面から測定しているので, 重回帰分析を11回おこなう。

6 結果

(1) 変数の平均と標準偏差

表1は, 独立変数と従属変数の平均と標準偏差を示している。平均年齢は74.89歳と高いけれど, 健康度の平均は3.52と比較的健康な回答者の多いことが分かる。また, 平均年収は230.41万円であり, 比較的裕福な回答者が多いことを看取できる。

表1 変数の平均と標準偏差

変数	平均	標準偏差
(独立変数)		
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.36	0.48
年齢	74.89	6.20
健康度	3.52	0.57
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)	0.70	0.46
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)	0.33	0.47
現在の就業の有無 (有: 1, 無: 0)	0.25	0.43
年収 (単位: 万円)	230.41	148.60
友人数① (相談ごと)	4.22	3.53
友人数② (金銭の貸し借りなど)	0.50	1.10
友人数③ (入院)	1.21	1.71
友人数④ (留守時の世話)	1.08	1.31
友人数⑤ (慰め)	2.00	2.06
友人数⑥ (些細な物・サービス)	1.67	1.80
友人数⑦ (年賀状の交換)	42.29	56.38
友人数⑧ (お祝い事)	7.47	6.99
友人数⑨ (飲食)	6.46	6.04
友人数⑩ (遊びや旅行)	5.89	6.31
友人数⑪ (訪問)	5.00	5.02
(従属変数)		
モラール	10.56	4.32

(注) 年齢の単位は歳, 年収の単位は万円。

(2) 独立変数間の相関係数

表2は, 重回帰分析で用いる変数間の相関係数を示したものである。複雑になるのを避けるため, 付き合い内容別の友人数を除いた, それ以外の独立変数間の相関係数をここでは示している。なお, 付き合い内容別の友人数とその他の独立変数との相関係数は, 表3に示した。

表2 独立変数間の相関係数 (友人数以外)

	年齢	健康度	配偶者の有無	同居子の有無	現在の就業の有無	年収
性別 (男性: 1, 女性: 0)	0.123 *	-0.103	0.251 **	0.092	-0.037	0.117 *
年齢		-0.010	-0.371 **	0.206 **	-0.035	-0.140 *
健康度			-0.048	0.095	0.001	0.060
配偶者の有無 (有: 1, 無: 0)				-0.192 **	0.085	0.348 **
同居子の有無 (有: 1, 無: 0)					0.111 *	0.001
現在の就業の有無 (有: 1, 無: 0)						0.040

(注) 片側検定 ** $p < .05$, * $p < .01$

表3 独立変数間の相関係数（友人数）

	友人数①	友人数②	友人数③	友人数④	友人数⑤	友人数⑥
性別（男性：1，女性：0）	0.041	0.084	0.070	0.105	-0.114 *	-0.006
年齢	-0.004	-0.061	-0.051	-0.056	-0.048	-0.130 *
健康度	0.106	-0.018	-0.101	0.113 *	0.091	0.107
配偶者の有無（有：1，無：0）	0.123 *	0.039	0.125 *	0.077	0.000	0.132 *
同居子の有無（有：1，無：0）	0.127 *	-0.047	-0.130 *	-0.080	0.013	-0.093
現在の就業の有無（有：1，無：0）	0.071	0.073	0.072	0.010	0.033	0.106
年収	0.257 **	0.102	0.074	0.081	0.029	0.150 *

	友人数⑦	友人数⑧	友人数⑨	友人数⑩	友人数⑪
性別（男性：1，女性：0）	0.350 **	0.157 *	-0.015	0.075	0.096
年齢	-0.072	0.040	-0.233 **	-0.118 *	-0.052
健康度	0.108	0.071	0.074	0.080	0.050
配偶者の有無（有：1，無：0）	0.203 **	0.076	0.150 *	0.191 **	0.106
同居子の有無（有：1，無：0）	-0.138 *	-0.022	0.087	0.033	0.022
現在の就業の有無（有：1，無：0）	0.088	0.184 **	0.141 *	0.223 **	0.272 **
年収	0.338 **	0.109	0.239 **	0.140 *	0.028

(注) 片側検定 ** $p < .01$, * $p < .05$
 それぞれの友人数の説明は、本文を参照。

表2で7つの独立変数間の関連を見ておく。まず、性別は年齢、配偶者の有無、同居子の有無、現在の就業の有無、年収と有意な関連があった。そして、男性は、年齢が高く、配偶者や同居子がおらず、就業しており、年収が高いという傾向がある。次に、年齢は配偶者の有無、同居子の有無、年収と有意な関連が見られた。そして、年齢が高いほど、配偶者がおらず、子どもと一緒に住んでおり、年収が低い。それから、配偶者の有無は同居子の有無および年収と有意な関連が見られ、配偶者がいると、子どもと一緒に住んでおらず、年収が高いという傾向がある。

表2と表3の独立変数間の相関係数を見ると、中程度であり、多重共線性は発生していないと考えられる。

(本論文の後半は、『研究集録』の第157号に掲載予定である。本稿で引用した文献は、次号の文献表で一括して提示する。なお、本論文は、野邊の指導のもとに大須賀が執筆した修士論文「地方小都市における高齢者の友人関係と主観的幸福感——香川県さぬき市の老人大学を対象にして——」の第6章にもとづいている。調査、分析、執筆はすべて大須賀がおこなった。『研究集録』に投稿するために、野邊が論文の形式となるように若干の書き直しをした。)